The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	カトゥッルス64歌はどういう歌なのか
Author(s)	渡辺, 浩司
Citation	待兼山論叢. 芸術篇. 2018, 52, p. 1-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76079
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

カトゥッルス64歌はどういう歌なのか

渡 辺　浩 司

キーワード：カトゥッルス／ペーレウスとテティスの結婚式／エクフラシス

カトゥッルスは、紀元前1世紀、共和政ローマの時代に活躍した恋愛抒情詩人である。彼が残した詩の大半は、人妻レスビアとの不倫の恋を歌う。64歌は、カトゥッルスの詩の中で唯一の小叙事詩（epyllion）である。[1] この詩は408行からなり、ペーレウスとテティスの結婚式を語りながらも、途中にテーセウスとアリアドネーの神話を語る200行に及ぶエクフラシス（図像の言語的描写）を挟む。一つの作品の中で異なる神話が結びつけられ、一読すると神話を断片的に引用し結びつけたという印象を持つ。しかも、この詩の中にはさまざまな登場人物の声が聞こえ、さまざまな登場人物の見方が提示される。これらが作品内でどう関係しているのかが問題になる。またギリシア神話からの引用も問題になる。そしてこの作品の主題は何なのかという問題も生じる。こうした問題については、すでに多くの研究がなされている。[2] しかし、カトゥッルス64歌の構成とその主題についてはまだ意見の一致をみていない。

本論では、語り手の声や語り方に注目してカトゥッルス64歌の構成を分析し、そのあとで、この作品の主題を吟味する。さまざまな神話を引用したり、テキスト内での相互連関を暗示したり、登場人物たちの声を響かせ、彼らの見方を提示したりするのは、他ならぬ語り手である。

あらかじめ分析した構造を示すと以下のようになる。各部分に便宜的にローマ数字を付した。

Ⅰ（1行から11行）アルゴー船の出航
Ⅱ（12行から21行）ペーレウスとテティスの出会い
Ⅲ（22行から30行）ペーレウスとテティスの結婚讃歌
Ⅳ（31行から42行）人間の来場
Ⅴ（43行から49行）王宮と新床
Ⅵ（50行から266行）エクフラシス
エクフラシスの始まり（50-51）
ベッドカバーのエクフラシス「見捨てられたアリアドネー」（52-75）
テーセウスとアリアドネーの恋（76-115）
語り手の介入（116-123）
アリアドネーの嘆き（124-131）
アリアドネーの独白（132-201）
アリアドネーの願い（呪い）を父神が聞き入れる（202-211）
アイゲウスの独白（212-237）
アリアドネーの願い（呪い）の成就（238-248）
ベッドカバーのエクフラシス「アリアドネーを救うバッコス」（249-264）
エクフラシスの終わり（265-266）
Ⅶ（267行から277行）人間の退場
Ⅷ（278行から302行）神々の来場
Ⅸ（303行から319行）パルカエ（運命の女神たち）
Ⅹ（320行から383行）パルカエの祝婚歌
Ⅺ（384行から408行）エピローグ
古の時代（384-396）
今の時代（397-406）
結び（407-408）

1　語り手の声と語り方の側面から

語り方の側面から見たとき、408行からなるこの作品は、幾つかの部分に分けることができる。部分に分けるときの基準は、まず第一に、テキストの中で物語が大きく変わるという点である。たとえば、パルカエ（運命の女神たち）が歌う祝婚歌は、前後の文脈から見て明らかに異なる部分である。

第二に、「昔々（quondam）」、「と言われている（dicuntur）」、「と言われていた（fertur）」「私は（ego）」「われわれに（nobis）」といった語り手がテキストに出てくる点である。たとえば、冒頭部分で「と言われていた」と語られるが、これは語り手であるカトゥッルスが昔語りとして、いわば他人事のようにギリシア神話を引用しているのである。

第三に、同じ言葉を行頭で繰り返すというアナポラ（anaphora）と呼ばれる修辞技法である。カトゥッルスは3回同じ言葉を行頭で繰り返す。昔語りとは別の次元で語り手であるカトゥッルスがしたことである。そこには、カトゥッルスの意図が読み取れる。

これら3つの点から64歌を分割すると、以下のようになる。

Ⅰ（1行から11行）アルゴー船の出航

冒頭は、アルゴー船の物語である。

Peliaco <u>quondam</u> prognatae vertice pinus
<u>dicuntur</u> liquida Neptuni nasse per undas
Phasidos ad fluctus et fines Aeetaeos
cum lecti iuvenes, Argivae robora pubis
auratam otantes Colchis avertere pellem
ausi sunt vada salsa cita decurrere puppi（1-6）（下線は論者）

昔々ペーリオン山の頂で生まれ育った松の木は
パーシスの流れへ、アエエーテースの国へ
ネプトゥーヌスの水の波間を泳いでいったと言われている、
それは、選ばれた若者たち、アルゴスの若者たちの精鋭が
コルキスから黄金の毛皮を手に入れようと、
大胆にも塩の海を樅の木の櫂で切り進んだときのこと。

「昔々……と言われている」という文章で始まる。冒頭から昔語りとなっている。

この冒頭6行には、アルゴー船という名前はあがっていないけれども、ペーリオン、パーシス、アエエーテース、ネプトゥーヌス、アルゴス、コルキスと6つ固有名詞があがっている。ペーリオンはテッサリア地方の山、パーシスはコルキスの川であり、アエエーテースはコルキス王、コルキスはコーカサス地方の町であり、これらはいずれもアルゴー船の物語（『アルゴナウティカ』）を連想させる。イアーソーンが英雄たちとともにアルゴー船でコルキスまで行き、黄金の羊の毛皮を取ってくるという物語である。コルキスの地で、イアーソーンは王女メーデイアと出会い、恋に落ち、メーデイアの援助により黄金の毛皮を手に入れギリシアに戻る。ギリシアに戻った後の話は、エウリーピデースの悲劇『メーデイア』が伝えてくれる。ギリシア帰国後メーデイアはイアーソーンに見捨てられ、自分の子供を殺すことで、イアーソーンに復讐する話である。

肝心のアルゴー船の名前はあげられていない。こうしてアルゴー船の神話を読者に意識させて物語は始まるが、しかし話は別の神話へと移る。

Ⅱ（12行から21行）ペーレウスとテティスの出会い

この箇所では、アルゴー船がコルキス目指して航海しているとき、海のニンフたちが波間に姿を現し、アルゴー船の乗組員ペーレウスがテティスに恋したことが語られる。『アルゴナウティカ』ではペーレウスがアルゴー船に

乗り組む前にテティスと結婚していたが、話の順序が逆になっている。[3] ここでもアルゴー船は名指しされず、「怪物（monstrum）」と言われるだけである。「怪物」は、のちにエクフラシス中に出てくるミーノータウロスを暗示しているのかもしれない。

ペーレウスとテティスの結婚といえば、パリスの審判が思い出される。パリスの審判は、叙事詩圏の「キュプリア」と結びつく。のちにルキアノスによって『女神たちの審判』という作品にもなる。またテティスとペーレウスの息子はアキッレウスである。トロイアー戦争の英雄であり、ホメーロスの叙事詩『イーリアス』と結びつく。しかしこうした神話への言及はない。

ペーレウスがテティスと恋に落ち、二人の結婚が決まった経緯については、次のように語られている。

tum Thetidis Peleus incensus fertur amore,
tum Thetis humanos non despexit hymenaeos,
tum Thetidi pater ipse iugandum Pelea sensit.（19-21）（下線は論者）

そのとき、テティスへの愛にペーレウスは燃え上がったと言われている、
そのとき、テティスは人間との結婚を嫌がることがなかった、
そのとき、テティスにはペーレウスが結ばれるべきだと父神自身考えた。

この3行には2つの特徴が認められる。まず第一に、fertur（「と言われている」）という表現である。[4] 冒頭部分（Ⅰ（1行から11行））を上に引用したが、そこでも、quondam...dicuntur（「昔々……と言われている」）と語られていた。語り手がいわば他人事のように引用しているのである。第二に、3回同じ表現を繰り返す技法が用いられていることである。tum Thetidis---, tum Thetis..., tum Thetidi...と3度繰り返される。[5] こうした詩的技法によってペーレウスとテティスの結婚がこの詩のテーマであることがうかがわれる。

Ⅲ（22行から30行）ペーレウスとテティスの結婚讃歌

この箇所で語り手が登場する。彼はこの詩で神々とペーレウスとテティスの結婚を歌おうという。

o nimis optato saeclorum tempore nati
heroes, salvete, deum genus! o bona matrum
progenies, salvete, iter〈. . .　　23b
vos ego saepe meo vos carmine compellabo.
teque adeo eximie taedis felicibus aucte,
Thesaliae columen Peleu, cui Iuppiter ipse,
ipse suos divum genitor concessit amores.
tene Thetis tenuit pulcherrima Nereine?
tene suam Tethys concessit ducere neptem,
Oceanusque, mari totum qui amplectitur orbem?（22-30）（下線は論者）

おお、英雄たちよ、時代の最も幸福なときに生まれた者たちよ、
ご機嫌麗しく、神々の一族よ、女神たちの高貴な
息子たちよ、ご機嫌麗しく、〈. . .
お前たちにわたしはしばしば、お前たちにわたしの歌で話しかけよう。
お前にとりわけ、幸福な結婚の松明で大いに祝福された者よ、
テッサリアーの柱、ペーレウスよ、ユピテル（ゼウス）自身が、
神々の父自らが自分の愛を譲ったのだ。
お前を抱きしめたのはネーレウスの最も美しい娘テティスだったのか？
お前に孫娘との結婚を認めたのはテーテュスと、
全世界を海で囲むオーケアヌスだったのか？

ここで、語り手であるカトゥッルスが2回、つまり、22行から24行において神々の一族に対して、25行から30行おいてペーレウスに対して呼びかけ

ている。[6] しかもペーレウスに対する呼びかけには、「お前に／を（teque, tene, tene）」と行頭で3度同じ言葉が遣われている。

Ⅳ（31行から42行）人間の来場

待ちに待った結婚式の日がやってくる。テッサリアー全土から人々は結婚式に出席するために王宮に集う。彼らは、贈り物を携えて、顔には喜びを浮かべている。しかし結婚式に出席する人々の幸福な姿はこれ以後語られない。語られるのは、人々が結婚式に出席するため放置された田野やブドウ畑であり、世話をする人のいない家畜であり、剪定されず伸び放題の樹木であり、錆び付いた農耕具である。

rura colit nemo, mollescunt colla iuvencis,
non humilis curvis purgatur vinea rastris,
non glebam prono convellit vomere taurus,
non falx attenuat frondatorum arboris umbram,
squalida desertis rubigo infertur aratris.（38-42）（下線は論者）

田舎のことを世話する人はなく、若い雄牛の首は柔らかくなり、
低い葡萄の木は曲がった鍬できれいにされることもなく、
牛は曲がった鋤の先で土地を掘り返すこともなく、
剪定師の鎌も木陰を間引くこともなく、
鋤は打ち捨てられ錆つき、ざらざらとする。

この箇所では、「ではない（non）」という言葉が3行にわたり冒頭で遣われている。すでにⅡ（12行から21行）の部分（ペーレウスとテティスの出会い）とⅢ（22行から30行）の部分（ペーレウスとテティスの結婚讃歌）でも、行頭で3回同じ単語が繰り返し遣われていた。各部分でこの技法が用いられている。

Ⅴ（43行から49行）王宮と新床

話は、結婚式が執り行われる王宮に飛ぶ。王宮は金銀財宝であふれ、象牙の玉座は白く輝き、王宮全体が華やぎ目を瞠るばかりである。王宮の中央に新床がある。その新床は、紫貝で染められたベッドカバーで覆われている。

この部分には、「と言われている」という表現も「私は」という表現も用いられていない。また行頭に同じ単語が3回繰り返えされるということもない。

Ⅵ（50行から266行）エクフラシス

王宮の中央に位置する新床を覆うベッドカバーのエクフラシスへ移る。エクフラシスは50行から266行まで続き、この詩全体の半分を占める。しかし順番に見ていくと、本当のエクフラシスは2箇所しかないことが分かる。まず冒頭は次のように語られる。

50行から51行（エクフラシスの始まり）

haec vestis priscis hominum variata figuris
heroum mira virututes indicat arte.（50-51）

このベッドカバーは、古の人々の姿で飾られていて、
英雄たちの美徳を見事な技術で示している。

52行から75行（「見捨てられたアリアドネー」）

こうして始まるエクフラシスは、テーセウスに見捨てられたアリアドネーの絵柄についてである。そこでは、ナクソス島の海岸に一人で立ち尽くし、テーセウスが船で去っていくのを呆然と見ている場面が描写されている。見捨てられたアリアドネーの姿は、ペーレウスとテティスの結婚式に人間たちが参加したために、荒れ果てた田舎、耕す人のいない土地、世話をする人のいない葡萄畑、放置された牛、錆びついた農具を暗示しているかもしれない。

このエクフラシスにも3行にわたり同じ言葉が行頭で遣われている。

non flavo retines subtilem vertice mitram,
non contecta levi velatum pectus amictu,
non tereti strophio lactentis vincta papillas,（64-66）（下線は論者）

金髪の頭を精巧な頭飾りで飾ることもなく、
軽い衣で胸をおおい隠すこともせず、
柔らかい胸帯を乳白の乳房に巻くこともせず、

行頭で同じ言葉が3回繰り返されている。この修辞技法は、Ⅱ（12行から21行）の部分（ペーレウスとテティスの出会い）とⅢ（22行から30行）の部分（ペーレウスとテティスの結婚讃歌）、Ⅳ（31行から42行）の部分（「人間の来場」）でも用いられていた。しかも「でない（non）」は、Ⅳ（31行から42行）の「人間の来場」の部分と同じ言葉である。「見捨てられたアリアドネー」の部分が「人間の来場」の部分と関係しているとの印象を与える。

76行から115行（テーセウスとアリアドネーの恋、テーセウスのミーノータウロス退治）

「見捨てられたアリアドネー」のエクフラシスの後で、「人々の言うところでは（perhibent）」と昔語りに移行する。作品の冒頭が「昔々（quondam）……と言われている（dicuntur）」から始まったのと同じように、アリアドネーとテーセウスの恋の話が「人々の言うところでは（perhibent）、かつて（olim）」という形で始まる。直前のエクフラシスが契機となり、物語はアリアドネーとテーセウスの恋へ移行するのである。したがって、厳密に言えば、ここからはエクフラシスではなく、語り手による昔語りである。

nam perhibent olim crudeli peste coactam
Androgeoneae poenas exsolvere caedis
electos iuvenes simul et decus innuptarum

Cecropiam solitam esse dapem dare Minotauro.（76-79）（下線は論者）

すなわち人々の言うところでは、かつて悲惨な疫病によって
アンドロゲオース殺害の罪を償うことを強いられて、
選ばれた若者たちとともに乙女の花を
ご馳走として、ケクロプスはミーノータウロスに与える慣わしだった。

「人々の言うところでは」で始まるアリアドネーとテーセウスの恋の物語は、次のようになっている。テーセウスがミーノータウロスを退治するためにクレータ島に来たこと、そこでクレータ島の王女アリアドネーと出会い、アリアドネーがテーセウスに一目惚れすること、テーセウスはアリアドネーの援助を得てミーノータウロスを倒し、糸玉を手繰って迷宮から無事に脱出できたことが語られる。101行目ではミーノータウロスが「怪物（monstrum）」と表現されているが、「怪物」は冒頭の箇所ではアルゴー船のことを意味していた。エクフラシス内の物語がエクフラシス外の物語を想起させる。

116行から123行（語り手の介入）

116行目で、突然、語り手としてのカトゥッルスが現れる。すなわち、

sed quid ego a primo digressus carmine plura
commemorem, ut linquens genitoris filia vultum,（116-117）（下線は論者）

しかしなぜわたしは最初の歌から離れて多くのことを
話しているのか。どうして娘は父の面前をあとにして

語り手としてのカトゥッルスは、これまでの話が脱線だったとして本筋に戻ろうと言う。語り手の登場は、先に見た「ペーレウスとテティスの結婚讃歌」（22-30）における「お前たちにわたしは（ego）しばしば、お前たちにわた

しの歌で話しかけよう」（24）を思い起こさせる。つまりエクフラシス内の物語（テーセウスとアリアドネーの恋の物語）がエクフラシス外の物語（ペーレウスとテティスの結婚の物語）を想起させる。そして、これまでエクフラシス内のテーセウスとアリアドネーの恋の物語が脱線であり、本筋はペーレウスとテティスの結婚だと一瞬読者に思わせる。しかし、本筋はアリアドネーの絵柄のことである。「どうして娘は父の面前をあとにして」と言われているのは、アリアドネーのことだからである。こうして再びアリアドネーの絵柄に戻ると言うわけだが、しかしまた「と人々は言う（perhibent）」という昔語りが現れる。

124 行から 131 行（アリアドネーの嘆き）

この箇所は「と人々が言う」という昔語りでしめられている。

saepe illam perhibent ardenti corde furentem
clarisonas imo fudisse e pectore voces,（124-125）（下線は論者）

彼女はしばしば煮えたぎる心で怒り狂い心の底から、
つんざく叫び声をあげたと人々は言う。

「人々は言う（perhibent）」という動詞は、この箇所全体（124 行から 131 行まで）を支配している。怒り狂うアリアドネーは、最後に「涙で顔を濡らし、冷たい嗚咽をあげ、最後のお願いを次のように語ったと人々は言う」（130-131）と物語られる。

132 行から 201 行（アリアドネーの独白）

アリアドネーの最後のお願いは 132 行から 201 行までにわたり、独白という形式で、つまり直接話法で語られる。自分を見捨てて不実なテーセウスに向けて、なぜ見捨てたのか、結婚まで願ったのにと悲嘆を口にするとともに、

侍女としてテーセウスに仕えてもいいから一緒に家に連れてくれとテーセウスへのまだ消えぬ恋心を吐露する。しかし後半からはテーセウスへの呪いを言葉にして、自分と同じ目に遭うようにと復讐の女神エウメニデスに嘆願する。この箇所には、「と言われている」、「昔々」という表現も、行頭で同じ言葉を3回繰り返す表現もない。

アリアドネーの独白には、メーデイアの神話を思い出させる箇所がある。「はじめからアテーナイの船がクレータ島の岸に到着しなければよかったのに、飼い慣らされていない牛に不吉な捧げ物を運ぶ不実な船がクレータ島に綱を下さなければよかったのに、甘い姿に酷い計画を隠したあの悪い男が私の家の客人として泊まらなければよかったのに」（171-176）は、エウリーピデース『メーデイア』冒頭に対応する。[7] メーデイアの神話は、この詩の冒頭で語られたアルゴー船の物語を想起させる。このようにアリアドネーの独白は、エクフラシス内の物語を超えて枠の外の物語を想起させる仕組みになっている。

202行から211行（アリアドネーの願い（呪い）を父神が聞き入れる）

神々の父ゼウスがアリアドネーの願いを聞き入れる。この箇所には、「と言われている」、「昔々」という表現も、行頭で同じ言葉を3回繰り返す表現もない。

212行から237行（アイゲウスの独白）

212行に「かつて」「と人々は言う」という表現が出てくる。

namque <u>ferunt</u> <u>olim</u>, classi cum moenia divae
linquentem gnatum ventis concrederet Aegeus,
talia complexum iuveni mandata dedisse.（212-214）（下線は論者）

すなわち、<u>かつて</u>、女神の城壁を船で去る息子を

アイゲウスが風に委ねたとき、アイゲウスは
息子を抱きしめ次のような命令を与えたと人々は言う。

「次のような命令」は、直接話法で語られる。アテーナイ王アイゲウスは、ミーノータウロス退治へ行くテーセウスを嘆きながら送り出し、出航する船は黒い帆を上げよ、しかし退治に成功したときには白い帆をあげて帰国せよと命令する。

238行から248行（アリアドネーの願い（呪い）の成就）

テーセウスは、アリアドネーを置き去りにしたあとで、一路母国アテーナイを目指す。しかし不実なテーセウスは、父との約束も忘れて、出港時と同じ黒い帆を上げて帰国し、黒い帆を城壁から見た父は絶望し身を投げる。

この箇所には、「と人々は言う」、「かつて」という表現も、行頭で同じ言葉を3回繰り返す表現もない。

249行から264行（「アリアドネーを救うバッコス」）

249行からは、アリアドネーを助けに来るバッコスのエクフラシスである。バッコスは、一人取り残されたアリアドネーを見て、愛に燃えて彼女を助けにくる。バッコスはアリアドネーを妻にすることになるのだが、しかしここではそのことは描写されない。描写されるのはバッコスのお供の者たちマイナス（マイナデス）である。笛を吹き、タンバリンをたたき、シンバルを鳴らし、エウホイ、エウホイと叫びながらバッコスにつき従う。

251行にはエクフラシスが始まる合図が記されている。

at parte ex alia florens volitabat Iacchus　251

［ベッドカバーの］別の部分では華やぐバッコスが飛んでいた

「別の部分では」というのがエクフラシスの合図である。一般にエクフラシスは叙事詩において、「そこには……があった」とか「そこに……を作った」とかいうように、場所を指示する単語で始まる。ここにもエクフラシスの定型が認められる。

また、行頭で3回同じ単語が用いられている。

harum pars tecta quatiebant cuspide thyrsos,
pars e divulso iactabant membra iuvenco
pars sese tortis serpentibus incingebant,
pars obscura cavis celebrabant orgia cistis,（256-259）（下線は論者）

彼女たちのあるものは、先の覆われたバッコスの杖を振り回していた、
あるものたちは、若い雄牛を引き裂いてはその四肢を投げつけていた、
あるものたちは、とぐろ巻く蛇を自分の体に巻きつけていた、
あるものたちは、箱に深く収められた暗い秘宝をうやまい集っていた、

最初のエクフラシス（「見捨てられたアリアドネー」）でも行頭で3回同じ単語が用いられていた。二つのエクフラシスが対照をなしていることを強く印象づける。

265行から266行（エクフラシスの終わり）

エクフラシスの終結は次のように語られる。

Talibus amplifice vestis decorata figuris
pulvinar complexa suo velabat amictu.（265-266）

このような姿によってベッドカバーは壮麗に装飾され、
結婚の床を覆い包み隠していた。

こうして50行から266行までのエクフラシスが終わる。詩全体の半分を占めるほどの長さである。しかし実際のエクフラシスは最初と最後の二つの絵柄であり、その二つの絵柄の間に、テーセウスとアリアドネーの恋が語られていた。

Ⅶ（267行から277行）人間の退場

ベッドカバーを見ていた人々はその見事さに満足して、結婚式の会場をあとにする。ここには「と人々が言う」、「昔々」という言葉も遣われていない。同じ言葉が行頭で3回繰り返されることもない。

Ⅷ（278行から302行）神々の来場

人間たちが去った後で神々が結婚式にやってくる。ケイロン、ペーネイオス、プロメーテウスがやってくる。そして神々の父ゼウスが妻と息子をつれてやってくる。アポッローンとアルテミスは来ない。ここで、語り手のカトゥッルスがアポッローンに呼びかける。

advenit, caelo te solum, Phoebe, relinquens,（299）

［ゼウスが］、ポイボス［・アポッローン］よ、お前一人を天に残してやってきた。

この呼びかけは、「Ⅲ（22行から30行）ペーレウスとテティスの結婚讃歌」中の26行「テッサリアーの柱、ペーレウスよ」を思い起こさせる。

Ⅸ（303行から319行）パルカエ（運命の女神たち）

パルカエは三姉妹の老婆である。この箇所ではパルカエの人物描写となっている。エクフラシスと呼んでもいいほどの描写となっている。ここには「と人々が言う」、「昔々」という言葉も遣われていない。同じ言葉が行頭で

3回繰り返されることもない。

X（320行から383行）パルカエによる祝婚歌

パルカエの祝婚歌は次のように始まる。

hae tum clarisona vellente vellra voce
talia divino fuderunt carmine fata,
carmine, perfidiae quod post nulla arguet aetas.（320-322）（下線は論者）

彼女たち［パルカエ（hae）］は羊毛を紡ぎながら、よく響く声で
次のような運命を神の歌にして歌った、
それは、どんなに時が経ても真実でないと証明されることがない歌。

そしてパルカエの祝婚歌は次のように終わる。

talia praefantes quondam felicia Pelei
carmina divino cecinerunt pectore Parcae.（382-383）（下線は論者）

かつて、パルカエはこのような幸福をペーレウスに予言して、
神の心から歌を歌った。

この始まりと終わりは、エクフラシスの始まりと終わりに対応している。エクフラシスは、「この（haec）ベッドカバーは、古の人々の姿で飾られていて、英雄たちの美徳を見事な技術で示している（50-51）」で始まり、「このような（talibus）姿によってベッドカバーは壮麗に装飾され、結婚の床を覆い包み隠していた（265-266）」で終わっていた。

パルカエの祝婚歌自体は直接話法で歌われる。その内容は、ペーレウスとテティスを褒め称えるというものではく、未来の予言である。やがて二人の

間に英雄アキッレウスが生まれ、トロイアー戦争で活躍し、ヘッレスポントスは殺戮されたトロイアー人の死体でせき止められるだろう、アキッレウスが死んだあとも彼の墓にトロイアー人は生贄を捧げるだろうと歌う。こうした未来が待っているのだから二人の愛を成就させなさいと歌う。死体や戦争や墓という言葉がちりばめられていて全体に暗いイメージが漂う。

Ⅺ（384行から408行）エピローグ

エピローグはさらに3つの部分に分かれる。384行から396行にかけて古の時代が語られる。冒頭はふたたび「昔々（ante）」という言葉で始まる。

praesentes namque ante domos invisere castas
heroum et sese mortali ostendere coetu
caelicolae nondum spreta pietate solebant.（384-386）（下線は論者）

すなわち、昔々、天上に住む神々は、信仰心が軽んじられていないとき、
人間の姿になって、英雄たちの敬虔な家々を訪れ、死すべき集会に
自らの姿を現わすのが常であった。

かつての英雄の時代を語るさいには、「しばしば（saepe）」という言葉が行頭で3回繰り返される。

saepe pater divum templo in fulgente revisens　387
saepe vagus Liber Parnasi vertice summo　390
saepe in letifero belli certamine Mavors　394　（下線は論者）

しばしば、神々の父はきらめく神殿を訪れ、
しばしば、パルナーソス山の高い頂をさまようバッコスは、
しばしば、戦争の死をもたらす衝突でマルスが、

このように2から3行ごとに「しばしば（saepe）」という言葉が3回用いられている。この点で、これまで3行にわたって連続して同じ言葉が用いられていたのとは異なるが、エピローグとしてこれまでの昔語りを要約している。つまり古の時代は、行頭で同じ言葉を3回繰り返すという技法で古の時代が3つの点にまとめられているのである。

古の時代の3つの点とは、神々の父が人間の前に姿を現してお祭りにやってきたこと、バッコスが自分の崇拝者たちを伴って歌い踊っていたこと、戦争において軍神マルスが人間たちとともに戦ったことである。

これに対して、今の時代は397行から406行にかけて語られる。今の時代について語るときには、同じ言葉が3回行頭で繰り返される修辞技法は用いられていない。また古の時代は3つの点にまとめられていたのに対して、今の時代は4つの事例にまとめられている。それら4つの事例は、兄弟が殺し合い（399）、息子が親の死を嘆かず（400）、父親は息子の死を願い（401-402）、母親は息子の床に忍び込む（403-405）というものである。

そしてまとめとして、407行から408行で、英雄たちと神々がともにあった時代が終わり、神々は人間の前に姿を現わさなくなったとされる。

以上で、64歌全体の構成を、語り手の声や語り方に焦点をあてて分析した。その結果は、本論冒頭で示した通りである。

エクフラシスに焦点を当ててみると、エクフラシスは枠物語を作る機能を果たしている。エクフラシスを契機にして、物語はペーレウスとテティスの結婚からテーセウスとアリアドネーの神話へと移行する。エクフラシスが終わると、物語は再びペーレウスとテティスの結婚へ戻る。つまりテーセウスとアリアドネーの恋の物語は、ペーレウスとテティスの結婚という物語の入れ子の構造になっていて、いわば枠物語となっている。枠物語として理解するとき、ペーレウスとテティスの幸福な結婚に対して、テーセウスとアリアドネーの不幸な恋が対置される。とはいえ、ペーレウスとテティスもテーセウスとアリアドネーも英雄の時代に生きた。この英雄の時代における対置が、

さらに今の時代と対置されることになる。ここで対置は、対照なのか比較なのか、それとも類似なのかという問題が生じる。また対置された各部分とこの詩全体との関係も問題になる。さらに、エクフラシスの始まりと終わりは、パルカエの祝婚歌の始まりと終わりと同じ構造になっていた。対置をどう理解するか、部分と全体をどう理解するか、類似する構造をどう理解するかは読者に委ねられている。

語り方の点では、「と言われている」「かつて」という昔語りの言葉が遣われ、さらに行頭で3回同じ言葉を繰り返す技法が用いられている。しかもエクフラシスの内と外で、語り方がまったく変わっていない。また、エクフラシス内の物語には、エクフラシス外の物語を暗示する語りが多い。エクフラシス内外でこの詩全体において織り込まれている語句やイメージについては、「怪物」がアルゴー船を意味する一方でミーノータウロスも意味しうること、「私は」がエクフラシスの内外にそれぞれ1度出てくること、見捨てられたアリアドネーの姿が見捨てられたテッサリアーの地を暗示することなどを指摘した。この語りの機能、つまり、語りの一貫性は、読者に、エクフラシスがこの詩の全体に行き渡っているという印象さえ与える。[8] あるいは、エクフラシス内外が一つのまとまりとして物語られているという印象を与える。

小さい物語をつなぎ合わせエクフラシスを利用することで枠構造を作る一方、昔語りや言葉の暗示によるイメージを利用して一つの詩としての統一を与えるという点に、語り手であるカトゥッルスの企みがある。物語の統一ではなく、イメージの連鎖かならなる詩と言えるかもしれない。

それでは、この構成から読み取れるこの詩の意味内容はどのようなものだろうか。

2　カトゥッルス64歌はどういう内容なのか

カトゥッルス64歌の主題は、英雄の時代を懐かしみ鉄の時代を嘆く悲観的な詩であるというのが一般的な解釈である。[9] この詩は暗いイメージであふ

れている。テッサリアーは結婚式のとき荒れはてていた。アリアドネーはテーセウスに見捨てられた。ペーレウスとテティスの結婚は、アリアドネーの不幸な結婚と対比されていると理解できる。パルカエの祝婚歌はお祝いを述べるというよりかは、未来の不幸を予言する内容ともとれる。英雄の時代はよかったが、すでにその時代に未来の不幸の種があり、その種が発芽して今の時代になったというわけである。昔も今もそれほど変わらないが、英雄の時代の方がまだよかったというのがこの解釈である。しかしパルカエの祝婚歌は不幸を予言しているのか。パルカエは英雄アキッレウスの誕生という輝やかしい未来を予言していたのである。[10)]

また、この作品には作者本人の考えが反映されているとする解釈もある。カトゥッルス本人は人妻レスビアとの恋を歌う恋愛詩人として名高い。64歌は作者カトゥッルスがモラリストになった、あるいはモラリストのふりをした唯一の歌だと解釈できる。[11)] しかし、この詩を理解するためにカトゥッルス本人の考えや他の詩の知識を必要とするのだろうか。[12)]

改めてこの作品を一つのまとまりとして見ると、時代を語る部分と結論の部分に大きく分かれる。時代を語る部分は、冒頭から406行である。冒頭部分は、繰り返しの引用になるが、次の通りである。

Peliaco <u>quondam</u> prognatae vertice pinus
dicuntur liquida Neptuni nasse per undas
Phasidos ad fluctus et fines Aeetaeos（1-3）（下線部は論者）

<u>昔々</u>ペーリオン山の頂で生まれ育った松の木は
パーシスの流れへ、アエエーテースの国へ
ネプトゥーヌスの水の波間を泳いでいったと言われている

そして時代を語る部分の終わりは以下の通りである。

omnia fanda nefanda malo permixta furore
iustificam nobis mentem avertere deorum.（405-406）（下線部は論者）

口にできることもできないことも悪い狂気によって混ぜ合わされ、
そのすべてが神々の正しい心をわれわれから奪ってしまった。

こうして「昔々」から「われわれ」までの時代が物語られる。結論に当たる部分は、最後の2行（407-408）である。

quare nec tales dignantur visere coetus,
nec se contingi patiuntur lumine claro.（407-408）（下線部は論者）

そういうわけで、［神々は］このような集会を訪れようとはせず、
明るい光に自らを触れることに堪えることもないのである。

時代を語る部分は、さらに、古の時代を語る部分と今の時代を語る部分に分けられる。古の時代を語る部分と今の時代を語る部分を分かつのが、397行にある「しかし（sed）、地上が極悪非道な罪に染められた」という語りである。昔々（quondam）の様子があり（1-396）、しかし（sed）今の様子（nobis）があり（397-406）、その対比を受けて、したがって（quare）神々が人間の前に現れないという結論（407-408）が導かれているのである。

古の時代を語る部分は、すでに第1節で見てきた。今の時代を語る部分の最初と最後は次のようになっている。

sed postquam tellus scelere est imbuta nefando,
iustitiamque omnes cupida de mente fugarunt,（397-398）
・・・
omnia fanda nefanda malo permixta furore

iustificam nobis mentem avertere deorum.（405-406）

しかし、地上が極悪非道な罪に染められ、
人々がみな欲望まみれの心から正義を追い出した。
（略）
口にできることもできないことも悪い狂気によって混ぜ合わされ、
そのすべてが神々の正しい心をわれわれから奪ってしまった。

nefando（397）、nefanda（405）が2回用いられている。この言葉は、今の時代を語るこの箇所でしか用いられていない。今の時代はnefandaとfandaが混ぜ合わされている。「欲望まみれの心から正義を追い出した」と言われているように、「欲望まみれの心」はとくに今の時代の特徴ではない。そこから「正義を追い出した」のが今の時代なのである。その原因は「悪い狂気によって（malo furore）」とみなされている。

古の時代においては、まだ信仰心が軽んじられていないとき（nondum spreta pietate）（386）であり、それゆえ神々は祭儀やバッコスの祭りや戦争のさいに人間の前に姿を現した。しかし新しい時代においては、悪い狂気が原因となり（malo furore）口にできることも（fanda）口にできないこととも（nefanda）混ぜ合わされてしまった。したがって（quare）、神々は祭儀においても戦場においても人間の前に姿を現すことがなくなったのである。

では、「悪い狂気」とは何か。furorという言葉には狂気という意味もあるが、激情、強い愛という意味もある。furorという言葉は、アリアドネーの恋の場面でも用いられているが、アリアドネーの恋は「悪い」とは言われていない。アリアドネーはテーセウスに恋をして、ミーノータウロス退治の手助けをした。ミーノータウロスは、アリアドネーの兄である。妹が兄を殺すことを望んだということになる。これは、今の時代を語る4つの事例の1つ、兄弟が兄弟を殺すという事例に相当する。しかしアリアドネーは古の時代に属する人物である。アリアドネーを古い時代の人物とするのは何か。それは

テーセウスへの変わらぬ恋心であろう。アリアドネーは、恋心を捨てきれず、テーセウスの館の召使としてでもともに居ることを望んでいた。最後はテーセウスに呪いをかけるが、それも変わらぬ恋心の故である。テーセウスへの未練を断つことなく嘆き哀しむアリアドネーはやがてバッコスの妻になることが暗示されていた。この変わらぬ恋心を furor と表現したのではないだろうか。一方のテーセウスは、欲望が満たされるとアリアドネーとの結婚の約束も忘れ（145-149）、父親との約束も忘れた。テーセウスは、したがってアリアドネーによって「不実な（174）」、「この悪い男（175）」とは呼ばれている。しかしテーセウスには furor という言葉が用いられていない。彼には変わらぬ恋心がなかったのである。

今の時代を語る箇所に出てくる4つの事例は、兄弟が殺し合い（399）、息子が親の死を嘆かず（400）、父親は息子の死を願い（401-402）、母親は息子の床に忍び込む（403-405）であった。これの事例は、いずれも兄弟愛、親子愛が保たれていないことを示す。とくに父親が息子の死を願うのは息子の嫁を自分のものとするためであり、母親も息子を自分のものとするためである。そこには、愛はあるが、その愛がつねに変わっていく愛が認められる。この愛が「悪い狂気」と表現されたのではないか。

カトゥッルス 64 歌は、一方で、小さい物語をつなぎ合わせて枠構造を作りつつも一つの詩としての統一感を与えるという構成を持ち、他方で、つねに変わらぬ愛を主題とする歌なのである。

［注］

1）　カトゥッルス 64 歌は、カリマコスに代表されるアレキサンドリアの学者詩人の影響を受けている。カリマコスは、長大な叙事詩を嫌い短い叙事詩を好み、新奇性を追求した。カリマコス「叙事詩の環に属するような長詩は嫌いだ。多くの人をこなたかなたへと導く道もわたしの心には適わない。」沓掛良彦訳（『ギリシア詞華集　4』京都大学学術出版会、2017 年、31 頁、第 12 巻 43）。「文法家カリマコスは、大きな書物は大きな悪に等しいと言った」Callimachus

fr. 465(Pf) (Athenaeus)。

2） 64 歌は、作者カトゥッルスがいろいろな声や視点を織り込んで一つの作品としたというのはしばしば指摘される。Debrohun, J. B., “Ariadone and the Whirland of Fate: Figures of Confusion in Catullus 64. 149-57,” *Classical philology*, vol. 94 (1999), pp. 419-430. Gaisser, J. H., “Threads in the Labyrinth: Competing Views and Voices in Catullus 64,” *The American Journal of Philology*, vol. 116 (1995), pp. 579-616. テキスト内での声の響きあいや視点の対照、先行作品との関係（間テキスト性）については、以下が簡潔にまとめてくれている。Godwin, J., *Catullus : Poems 61-68*, Warminster, 1995, pp. 132-137.

論者は、64 歌中のエクフラシスについて小論をまとめた（「カトゥルルス 64 歌のエクフラシス：言葉とイメージ」（『ARTS & MEDIA』第 7 号（2017）、56-63 頁）。本論は、64 歌全体についてあらためて考察したものである。

64 歌の構成は、研究者によってさまざまである。代表的な見解を以下に記す。

Quinn の解釈（Quinn, K., *Catullus : The Poems*, London, 1973, p. 298f）

1-21　オープニング・タブロー。アルゴー船の出発
22-30　ペーレウスとテティスの結婚を祝す讃歌
31-42　第 2 タブロー。来賓の到着
43-49　第 3 タブロー。王宮と新床
50-51　ブリッジ・パッセージ。枠内物語への移行が始まる
52-70　第 4 タブロー。岸辺のアリアドネー、パート 1
71-75　ブリッジ・パッセージ。いったいどうしたのか
76-115　フラッシュバック。テーセウスのクレータ着。恋に落ちたアリアドネー。テーセウスに殺されたミーノータウロス
116-123　ブリッジ・パッセージ。われわれは岸辺のアリアドネーへ戻る
124-131　第 5 タブロー。岸辺のアリアドネー、パート 2
132-201　セット・スピーチ。アリアドネーの嘆き
202-214　ブリッジ・パッセージ。アリアドネーの呪いが受け入れられる。テーセウスへの影響。第 2 のフラッシュバックが始まる。テーセウスのアテーナイからの出航。
215-237　セット・スピーチ。アイゲウスの別れの言葉
238-248　第 2 のフラッシュバックが終結する。アリアドネーの呪いが成就する。
249-250　ブリッジ・パッセージ。新床にわれわれは戻る。
251-264　第 6 タブロー。バッコスと信者たち
265-266　ブリッジ・パッセージ。われわれは外の物語、ペーレウスとテティスの結婚日（52 行）へ戻る。

267-277　第 7 タブロー。人間の来賓が退場する
278-302　第 8 タブロー。神々の来賓が到着する
303-322　第 9 タブロー。パルカエ
323-381　パルカエの歌（祝婚歌）
382-383　ブリッジ・パッセージ。語りが終結する
384-408　詩人の最後のコメント

Godwin の解釈（Godwin, J., *op. cit.*, p. 132）
1-30　ペーレウスとテティスの出会い
31-49　人間の来場、王宮の描写
50-264　タペストリーのエクフラシス
　50-51　ブリッジ・パッセージ
　52-70　岸辺のアリアドネー
　71-75　ブリッジ・パッセージ
　76-115　テーセウスがクレータ島に着く。アリアドネーが恋に落ちる
　116-131　岸辺のアリアドネーへ戻るブリッジ・パッセージ
　132-201　アリアドネーの独白
　202-214　ブリッジ・パッセージ、アリアドネーの呪いからテーセウスのアテーナイ帰還へのフラッシュバック
　215-237　アイゲウスの別れの言葉
　238-248　アリアドネーの呪いが成就する
　249-250　タペストリーへ戻る
　251-264　バッコスと信者が来る
265-302　人間の退場と神々の来場
303-383　パルカエが祝婚歌を歌う
384-408　エピローグ

3）アポローニウス『アルゴナウティカ』1 巻 557-558。cf. Fordyce, C. J., *Catullus*, Oxford, 1961, p. 280f.

4）fertur を「と言われている」と理解せず、swept along on fire と解する解釈もある。その場合 20-21 行の despexit 及び sensit と時制があわなくなる。cf. Quinn, K., *op. cit.,* p. 304.

5）Thetis（テティスは），Thetidis（テティスの），Thetidi（テティスに）というように、同じ単語を異なった格で繰り返し使う技能は polyptoton と呼ばれる。

6）作者が登場人物に呼びかけるアポストロペーである。Quinn, K., *op. cit.*, p. 304. Godwin, J., *op. cit.,* p. 140f.

7）Quinn, K., *op. cit.*, pp. 320-321. Godwin, J., *op. cit.*, p. 155.

8） Morwoodは、50行の「variata」を典拠にして、詩全体の中に24のタブローがあると主張している。Morwood, J., “Catullus 64, Medea, and the Francois Vase,” *Greece & Rome*, vol. 46. (1999), pp. 221-231.
Morwoodの解釈。
タブロー1（1行から30行）アルゴー船の航海、ペーレウスがテティスと恋に落ちる
タブロー2（31行から49行）ペーレウスとテティスの結婚式に来賓が到着、テッサリアーの荒れた土地、王宮の中
タブロー3（52行から70行、249行から250行）岸辺のアリアドネー
タブロー4-5（76行から115行）テーセウスがクレータ島に到着、アリアドネーが恋に落ちる。テーセウスがミーノータウロスを退治
タブロー6（202行から206行）ゼウスがアリアドネーの願いを受け入れる
タブロー7（207行から211行、238行から245行）テーセウスの船が黒い帆をあげて帰国、アイゲウスが城壁から身を投げる
タブロー8（212行から237行）アイゲウスの別れの言葉
タブロー9（246行から248行）テーセウスの帰国と嘆き
タブロー10（251行から264行）バッコスと信者がアリアドネーを助けに来る
タブロー11（267行から277行）人間の来賓の退場
タブロー12（278行から302行）神々の来賓の到着
タブロー13（303行から327行）糸を紡ぐパルカエと祝婚歌
タブロー14（328行から336行）結婚の夜
タブロー15（339行から345行）戦場でのアキッレウス
タブロー16（345行から346行）アガメムノーンがトロイアーを攻略
タブロー17（348行から351行）息子の死を嘆くトロイアーの母親
タブロー18（353行から355行）戦場でのアキッレウス　ふたたび
タブロー19（357行から360行）アキッレウスがスカマンドロス川を屍体で塞ぐ。
タブロー20（362行から370行）ポリュクセナの生贄
タブロー21（376行から380行）結婚に子守と母親が反応
タブロー22（387行から389行）ゼウスが神殿を訪れる
タブロー23（390行から393行）バッコスと信者
タブロー24（394行から396行）女神が戦場で軍を励ます

9） Bramble, J. C., “Structure and Ambiguity in Catullus LXIV,” *Proceedings of the Cambridge Philological Society*, vol.16 (1979), 22-41.

10） Godwin, J., *op. cit.,* p. 134.

11） Putnam, M. C. J., “The Art of Catullus 64,” *Harvard Studies in Classical Philology*, vol. 65 (1961), pp. 165-205.

12）Godwin, J., *op. cit.,* p. 135. 中山恒夫氏は、カトゥッルスの他の詩（16 歌、30 歌、76 歌）から彼のピエタースの思想を導き出し、その思想がこの 64 歌で提示されていると解する。中山恒夫『ローマ恋愛詩人の詩論』、東海大学出版会、1995 年、57-73 頁、「第 3 章　カトゥルルス第 64 歌の教訓的結語について」。

（文学研究科准教授）

SUMMARY

On Catullus No. 64 : Structure and Theme

Koji WATANABE

Catullus was the greatest poet of Roman love elegy in the 1st century before Christian era. In his poems, no. 64 is the only epyllion or miniature epic. This short epic is not a simple linear story, but a story within a story : the marriage of Peleus and Thetis framed the love story of Theseus and Ariadne which was told in the ekphrasis of the tapestry on the marriage-bed.

Some people say that this poem consists of 26 parts, others say that it consists of 24 tableaux. Some say that the theme of this poem is pesimistic in its view of human nature and the heroic age, others say that in this poem Catullus is/pretends to be a moralist. Researchers vary from opinions on how this poem is structured and what the subject is.

In this paper I tried to analyze the structure of this epic and inquire what this epic meant. I concluded that Catullus no. 64 consists of 23 parts which were gathered together into two larger parts : older ages and the present. Catullus no. 64 was thought to insist that love, such as love of Ariadne, had not changed but had been constant in older ages, while love was not constant but was going to change in the present.